がん川柳集を毎年2000部発行し、がん患者の思いを共有－大分医療センターの医療ソーシャルワーカー・村上英恵さん、がん性疼痛看護認定看護師・廣田紘子さんに聞く◆Vol.1

2019年5月29日 (水)配信 m3.com地域版

独立行政法人国立病院機構大分医療センターでは、がん相談支援センターの職員が中心となって、がんにまつわるエピソードを綴る「がん川柳」を毎年募集し冊子にして発行している。その活動はNHKのドキュメンタリー番組にも取り上げられ、ユニークな活動として全国的にも注目を集めている。がん相談支援センターの業務を兼任する医療ソーシャルワーカー（MSW）の村上英恵さんと、がん性疼痛看護認定看護師の廣田紘子さんに、がん川柳を始めた経緯、応募の状況、作品の傾向、評判や反応、診療への影響や効果などについて話を伺った。（2019年1月23日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

――がん川柳を始めた経緯を教えてください。

村上　がん川柳を企画したのは岡江という私の前任の医療ソーシャルワーカーで、彼と廣田看護師が発起人として立ち上げました。

廣田　リレー・フォー・ライフというがん患者さんのチャリティーイベントがあるのですが、当院は毎年そこに参加しています。その時の企画として「がん患者さんと交流できるものが何かないか」とあれこれ調べていたら、がん川柳というものがあることを知りました。「患者さんたちは自分の思いを伝える場が少なく、言い出せないでいる方もいるのではないか。川柳で表現する事で自分の思いを表出できたり、共有する場になるのではないか」と考え、始めることにしました。企画はオリジナルではないですが、毎年募集して冊子にして配布しているのはおそらく当院だけだと思います。

がん川柳集を手にする村上さん（左）と廣田さん（右）

――最初は院内で募集したのでしょうか。

廣田　最初から全国で募集しました。インターネット上に様々な川柳を掲載しているサイトがあり、そこの方に声を掛けていただいて、募集が掲載されたことで東京や神奈川からも応募がありました。その後は認知度をさらに高めるために地元誌である大分合同新聞に掲載していただいたりもしました。応募者は、がん患者さんを中心に、がんを克服された方、ご家族、支援者、医療関係者、そして「自分はがんの体験はないけれども冊子を見て作ってみました」といった応募も数件あります。

――どのくらいの応募がありますか。

村上　毎年100件くらいの応募があり、大分県内からの応募とその他の地域からの応募が半々くらいです。リピーターの方もいまして、過去5回とも応募されている方もいます。がん川柳集の発行部数は毎回2000部で、手に取ってい

ただける方は毎年増えてきています。バックナンバーがもう数冊しかない号もあります。過去4回発行しているのですが、次の5号は2019年4月に発行の予定です。電話での問い合わせを受けて発送したり、院内をはじめ、他の病院のがん相談支援センターや大分県内の図書館などに置かせていただいたりしています。

これまで発行したがん川柳集

――どのような作品が多いですか。

廣田　それぞれですね。辛い気持ちを込められている作品だったり、勇気をもらえる作品だったり、なかには抗がん剤の副作用とかも面白い表現をされていたり。「こんなことを思ってらっしゃるんだ」という感じで、逆に私たちがいろいろと川柳を通じて教えてもらっている感じですね。患者さんやご家族からは、自分の気持ちを代弁してくれているもので、自分だけじゃないと思えたり、力をもらえたりしているという感想が寄せられています。

村上　川柳ってすっと心に入ってくるんです。しかも人によって心に刺さる句が違ったりします。それぞれの立場でいろんな方が書いてくださっていて、見る側もそれぞれご自身の状態に合わせて共感できる句というのがあるのかなと強く感じています。

――優秀賞の選定はどのように行っているのですか。

村上　院内の多職種で構成される委員会のメンバーで選考しています。優秀賞に選ばれた方は、当院で開催しているがんサロンで表彰させてもらっています。

　ちなみに優秀賞には以下のような作品が選ばれています。

「笑み添えて　弱気の虫を　摘む家族」（岐阜県）
「鏡見て　なかなかいけてる　尼僧顔」（神奈川県）
「あと一年　夫婦の絆で　のりこえる」（大分市　プリン）

優秀賞作品を院内に掲示し冊子を配布

――がん川柳の評判や反応はいかがですか。

村上　大分県内ではリレー・フォー・ライフで毎年展示しており、がん関係者の間ではかなり浸透してきているのかなと思います。外来の患者さんたちも立ち読みされて、ご近所の方、お友達、親戚にあげたいと言って2～3冊持っていかれたりします。個人的には患者さんたちが、そのように他の患者さんとの交流などに活用されている姿を見るのが一番嬉しいですね。

廣田　NHKのドキュメンタリー番組でも取り上げていただいて、全国の患者会の方々からも「ぜひ活用したいので送っていただけませんか」と連絡をいただきました。反響は大きかったですね。

――診療への影響や効果を何か感じていますか。

廣田　川柳を作ることが一つの目標となり、人生に張り合いが出てきたとおっしゃる方もいます。精神的に不安定だと治療もうまくいかないと思いますので、その意味で精神的なケアの一助になっているのではないかと感じています。なかには、20作品くらい入院中に作られて「次回応募させてほしい」と看護師に託して帰られた方もいます。川柳に思いを表出する事で、闘病生活の支えになっていたのではないかと思います。

――今後の目標や課題についてお聞かせください。

廣田　がん川柳を届けたい人にしっかり届けていくと同時に、多くの方が、がん患者さんのことを知るきっかけになってくれればいいなと思っています。そのためにも継続していくことが大事で、次の世代の方々にも引き継いでいってもらえたらとても有難いことかなと思っています。

村上　やはり続けていくことが大事だと思っています。応募者を増やすというよりは冊子の配布数を増していきたいです。置いていただける場所や配布できるイベントなどへの参加機会を増やして行って、少しでも多くの方に皆さんの作った句を見てもらいたいと思っています。現在は毎号2000部発行していますが、院長先生や副院長先生にお願いして、初版部数を増やして行きたいですし、これまで発行したものを1冊の本にしたり、他の方法についても検討していきたいと思っています。

取材・文・撮影＝堀 勝雄